

翻訳第三部 ~ フィヒテ - ハイデガー - ベンヤミン

- デリダ - 鵜飼 ~

講演会プレゼンテーション part.8 991115 犬飼太介

第0章 はじめに

翻訳という概念は、国民国家を単位とした近代的思考への反省、国民国家システムの動揺と無縁ではない。国民国家成立過程に逆行してネーションを再考するとき、そこには文化と言語、言語と翻訳のあいだに何らかの質的な関係が問われることになる。＜文化の翻訳/翻訳の文化というテーマがきわめてアクチュアルなものとして浮上してき＞(注1)ている。

鵜飼氏が、翻訳とは＜母語が欲望しているのではなかろうか＞(注2)と仮定するとき、まさしく翻訳の場は、言語が国家・文化等を代表して相争う闘争の場となるのではなかろうか。

当論では翻訳可能性・不可能性がこれまでいかに用いられてきたか、そして、一体翻訳が示すものは何か、それを明らかにするのが目的である。そして最終的には翻訳の持つ力を皆が前提とできるようになることを目指す。

鵜飼氏は述べる。

＜現代の翻訳論はこの二つの言語 = 翻訳思想の提起した重要な諸問題を引き受け、この両者をともに育んだ歴史 = 政治的文脈の解明を不可欠な環としつつも、両者がそれぞれに胎むいまだ形而上学的な構図を問い直すことで(中略)単一言語の内部では思考不可能なものに向けて、翻訳の理論と実践を解き放すことを中心的課題としている＞(注3)ここで語られ

る〈二つの言語 = 翻訳思想〉とはハイデガーとベンヤミンを指す。われわれはこの二つの検証から始めねばなるまい。その前提として、第一章ではフィヒテ『ドイツ国民に告ぐ』を見ていこう。

第一章 フィヒテ (1762-1814) にみる翻訳可能性/不可能性

ラテン語等の旧帝国の言語に対するローカルな言語の定立がネーションの成立の基本条件であったし、このネーションの起源は帝国からの分離・自立・民族言語の成立と不可分であった。周知の通り、ルターによる『聖書』翻訳(注4)がこれにあたる。

1. フィヒテによるドイツ語の位置づけ

ドイツ近代ナショナリズムの古典である『ドイツ国民に告ぐ』の中で、フィヒテは述べる。ドイツ人は、〈一つの根源的な民族〔Urvolk〕、民族そのものである民族〉(注5)だと。フィヒテがドイツ語を〈固有のもの〉かつ〈始源的な言語〉(注6)として、同時に〈この言語が途切れることなく話され続けている〉ものとして位置づけることが、ドイツ民族の単一性の根拠となる。他のゲルマン民族との差異化は、ドイツ人が〈最初の流れまで遡りうる生き生きとした言語を話し、〈残りのゲルマン種族は表面だけは活発であってもその根においては死んでしまっている言語を話している〉(注7)と規定することによってはかられる。

このような問題含みのドイツ語は、フィヒテにとって以下の力を持つとされる。

2 . ドイツ語の翻訳可能性/不可能性

ドイツ語はまさしく根源的な言語であるが故に、
外国人の言わんとすることをその拡がりの全域に応じ
て翻訳することができる > (注8)。つまりドイツ語は
< 基幹民族の元来の言語を保持してそれをさらに発達
させていった > (注9) ために、あらゆる言語を我有化
= 翻訳可能なのであるとする (注10)。

だが同時に、ドイツ語が根源的な言語であるが故に、
ドイツ語だけは他の言語が我有化 = 翻訳することがで
きない。ドイツ語だけが「生きる言語」であり、他の
言語は「死んでいる」ためである。

では、ある言語を他の言語から選別しそれに特権を
与えることができるとすれば、その特権化は何によっ
てなされるのであろうか？ 他の言語によっては近づ
きえない、唯一同化されることによってしか近づきえ
ないものがあるとすれば、その境界画定は何によって
行われるのだろうか？

3 . フィヒテからハイデガーへ

< もっぱらドイツ人のみが——恣意的な約束ごとで
死滅することのない始源的な人間としてのドイツ人の
みが——一つの民族を有している > (注11) とフィヒ
テが述べる時、そのドイツ人はいかに規定されうる
のか？ この問いはこう言い換えてもいいだろう、根
源的言語であるドイツ語によって把持されるものは何
か、と。

それは「精神」である。

< 精神性ならびにこの精神性の自由を信じる人、そし
てこの精神性をつうじて永遠に発展させようと欲する
人、そのような人々は (中略) われわれの同胞なので

す > [\(注12\)](#)

つまり、<死んだ言語と(中略)生き生きとした言語、つまり精神的な言語との区別がなされる>のだ。逆に言えば、<そのような「精神性」を思惟せず望まぬ者は、たとえドイツ人に生まれドイツ語を話すように見えても、たとえドイツ語の言語的と言われる能力をもっているとしても、「非ドイツ人であり、われわれにはよそ者」(中略)である > [\(注13\)](#)。この精神的なるものは、<ハイデガーの来るべきテキストたちと遠くから響き合う > [\(注14\)](#)。

第二章 ハイデガーの"Geist"

フィヒテと同じ論理の名の下に、ハイデガーは"Geist"を掲げる。両者とも、人が言語を作るのではなく、言語が人を作ると述べる [\(注15\)](#)。この言語の源泉はいかなるものか？

1. ハイデガーの"Geist" [\(注16\)](#) とは何か

フライブルグ大学総長就任演説において、ハイデガーはこう述べる。

<精神とは存在の本質へ向けての根源的に規定された決意なのです。さらに民族の精神的世界 (geist ige Welt : イタリックは犬飼) とは (中略) 民族の血と大地に根ざす力をその最深部において保持する威力であり (中略) ただ精神世界のみが民族の偉大さを保証する > [\(注17\)](#)。

デリダの説明を引用する。<〔精神〕の讚美は厳密に〔=固有に (proprement)〕、文字通りに、精神的なものの昂揚に呼応している。(中略)そこにおいて至高なるものが自らを表明し、自ら〔を〕建立する〔=

勃起する (s' éiger)] 制度の最高審級 (中略) にあたる精神は、自己自身を自己に肯定 = 主張しうるのみである > (注18)。このように内的矛盾を孕みながらも定立される "Geist"。以下において言語との絡みのもとに見ていこう。

2 . "Geist"の翻訳不可能性、その同化の動き

ハイデガーにおいてはギリシャ語とドイツ語、殊にドイツ語が、思惟することのできる、精神を名指すことのできる言語として特権化される (注19)。つまり < Geist は、ハイデッガーがあらゆる脱 [権] 力化から救出したがるものを名指している > (注20) のだ。このように "Geist" が、唯一の言語、ドイツ語によって我有化される。そして、ハイデガーはヨーロッパの言語の起源をギリシア語におき、ギリシア語とそれを内在化するドイツ語とを一体化 = 特権化し、 <<ヨーロッパ的なもの> を (犬飼注 : ドイツ語という) 固有言語 (イデオム) のなかに暴力的に閉ざす > 。ここにおいてドイツ・ナショナリズムが西洋を全体化する汎ナショナリズムへとすりかわっているのである (注21)。

3 . ハイデガーからベンヤミンへ

ハイデガーは "Geist" という単一起源的かつ最高位の概念をもって、レイシズム & ナショナリズムへと貢献した。"Geist" の翻訳不可能性を、民族とその「精神」の固有性・純粹性として置くことによって。デリダはこの原・母国語 = 祖母的言語を「処女のおばあちゃん」と名付ける。

< (ハイデガーは) まったくの処女 [vierge : 手つか

ず]であるようなギリシア語のおばあちゃん、手を触れてはならぬ [intouchable : 神聖な] 処女のおばあちゃんを想定しなければならないのです。(中略)この手を触れてはならぬ [神聖な] ものというモチーフは意味のないことではなく、ベンヤミンのテクストの中に見られるものです。つまり翻訳というものは何かに「触れる [toucher : 到達する]」ことはできない、何か「手を触れてはならぬ [神聖な] もの」があり、いかなる翻訳も触れる [到達する] ことはできない > (注22)

このベンヤミンにおける <何か> とは何か? これこそが「純粹言語」である。

第三章 ベンヤミン : 「翻訳者の使命 (注23)」と「純粹言語」

<二十世紀のドイツ思想は、固有言語の翻訳不可能性を徹底し、そこに存在の固有名を見出そうとする立場 (ハイデッガー) と、純粹言語をメシア的テロスとして設立することで翻訳概念の組み替えを図る立場 (ベンヤミン) を (中略) 生み出した > (注24)。この章では後者を検証する。(安江君のレジュメを参照のこと)

1. 純粹言語とは何か

ベンヤミン「翻訳者の使命」(注25)において、我々は「純粹言語」なる概念を見た。この「純粹言語」とはまさしくバベルの塔の解体(注26) = 言語の混乱以前にセム人が有していた単一の言語であり、それは神からの <言語という贈り物 (Gabe [天賦の才]) > (注27) である。 <父は彼の名(注28)を与えることによって、あらゆる名を与えることによって、言語活動の起源に

いるわけであり（中略）そして父なる神の名が諸言語のこうした起源の名であることになる > (注29)。

では、バベルの塔事件とは何だったのか。セム人が建設したバベルの塔を神が怒りにまかせて破壊すること、ここには何が示されているのか？

2. バベルの塔という事件、「純粹言語」の作用

ここでは、セム人の側（A）、神の側（B）の二点を考察をする。

A. セム人の企て

セム人のバベルの塔建設の目的は？ ヴォルテールを引くデリダは、「バベル(Babel)」という固有名(注30)を見る。 <「東洋語ではバは父を、ベルは神を意味」 > (注31)する。つまり、バベルを建設することによって <セム人たちは「自分たちのために一つの名を作り」(中略) 唯一の系譜の基をしつらえようと試みることによって、世界を理性のもとに置こう [mettre à la raison] と欲する。そしてこの理性は植民者的暴力を意味しうる（なぜならセム人たちはこうして彼らのイディオム（犬飼注：固有言語）を全世界に普及させるのだから） > (注32)。この企ては、時を経てドイツ語とその"Geist"を特権化し拡大しようとする企てと重なる。

説明しよう。この企ては人間間のコミュニケーションを透明にし普遍化しうる一方で、翻訳を不要とする。だが、他方で翻訳不可能な単一性 = 固有性を世界に押し広げるという意味で「植民地的暴力」なのだ。

B. 解体者としての神

神はこのようなセム人の企てに対して、自ら与えた言語を混乱させる。＜言語という贈与物を無効にする、あるいはともかくそれをごちゃごちゃにし、おのれの息子たちのあいだに混乱（コンフュジオン）の種をまき、贈り物を害毒たらしめる＞（注33）

ここでデリダは、ジョイスがバベルの塔に言及する箇所を引用する。それが＜And he war＞（注34）である。この語が持つ二重所属＝決定不能性＝翻訳不可能性は何を示すのか？

神はバベルの塔の解体者として人に＜翻訳を課すると同時に禁ずる。（中略）その翻訳は必ず失敗に終わるようにする＞（注35）。神がセム人たちに対抗するとき、セム人たちの＜理性的透明性を打ち破るが、しかしまたくだんの植民者的暴力ないし言語的帝国主義をも遮断する。神はセム人たちを翻訳に運命づけ、必要かつ不可能な翻訳という掟に服従させる＞（注36）。だが、デリダが＜And he war＞に見たように、ここでは神自身がダブル・バインドの中にいる。

A においては「純粹言語」への志向は否認される。そして、この B ではその「純粹言語」を与える神自身、起源自体も引き裂かれるとデリダは述べる。つまり（ベンヤミンに則って言えば）翻訳は、単一起源＝純粹言語に回帰することを「使命 Aufgabe」とするが、それは常に「断念 Aufgabe」（注37）されるのである。

3. 「純粹言語」への到達不可能性に何を見るか

故にこのバベルの塔の話は、＜諸言語の混乱の起源を、諸イディオム（犬飼注：固有言語）の解消不能な多数性を、翻訳が必要かつ不可能な課題であることを、つまり翻訳の、不可能性＞（注38）を語る（注39）。ベ

ンヤミンのように「純粹言語」を志向するのではない。翻訳は<言語が言語であることをわれわれに告げることです。すなわち、言語といったものが存在し、それゆえにこそ翻訳することができるのであるが、しかしまた、何か言語といったものが存在するからこそ翻訳することができない> (注40) ことを明らかにする。つまりベンヤミンのように諸言語の差異・親縁性を「純粹言語」に止揚することは決してなされないのである。

第四章 翻訳の力、ハリネズミ、ポストコロニアル

ここまでで以下の二点が明示される。

(1) . 翻訳はオリジナルを殺す

翻訳不可能なものとされる単一のオリジナル = 原典 = 起源を翻訳すること、それはオリジナルの持つ単一性 = 純粹性を破壊する契機としてある。(第二章への批判)

(2) . 翻訳は言語の複数性を指し示す、< 翻訳はその定義からして失敗する > (注41)

オリジナルが翻訳されること、第三章の3 . に即して言えば、オリジナルが翻訳を要請しているという限りにおいて、オリジナルは単一のものではない。翻訳はオリジナルにもともと内在する言語的複数性を曝露する。つまりオリジナルは本来的に、翻訳以前に差異 = 翻訳を含んでいる。従ってオリジナルは起源としての地位からずらされ、断片化する。同様に、ドイツ語の「翻訳 (ersetzen)」はギリシア語の「隱喩 (metaphorein)」の直訳であり、< それは移動すること、向こうへ渡すことでもあります。言うなれば 歟 ersetzen という語は隱喩を翻訳している > (注42) の

だ。つまり、ドイツ語の内部にはギリシア語が入り込んでおり、翻訳について語るベンヤミンのテキストもまた、翻訳であることが示される。

上記二点を、デリダはオリジナルをハリネズミに例えることで説明し、鵜飼もその解説をしている。

1. ハリネズミ

もともとロマン主義的作品概念において使用された「ハリネズミ」という比喻を、デリダは転倒させる。
(瀬古君のレジユメを参照のこと)

ハリネズミのアイロニーは、まさしく上記の(2)と通底する。破壊されることを恐れ、ハリネズミは<身を丸めて玉とな>るが、<自動車道で危険を察知して身を丸めるがゆえにそれは事故に身を晒す> [\(注43\)](#)。身を丸めたハリネズミが<「私の文字を食べよ、飲め、呑み込め、そういう文字を身につけ、きみの内部に運び込め」> [\(注44\)](#)と命令する。翻訳とはこのハリネズミの<道路の横断が、ちょうど事故がめったにないのと同じようにめったにうまくいきそうもないままとどまっており、しかしそれにもかかわらずその横断は強烈に夢想され(中略)是非とも実行されるようにと求め> [\(注45\)](#)ることなのだ。

2. 翻訳とポストコロニアリズム

第三章 2 -A を経て、当章の冒頭で述べられること。これはポストコロニアリズム的企図と重なる。<あらゆる文化はもともと植地的なものである。(中略)支配とは、人も知るように、名づけることの、すなわ

ちさまざまな呼び名を強制し正当化することへの権力から始まる。(中略)他者から強制された単一言語使用が(中略)植民地的本質をそなえて> [\(注46\)](#) いる。今回の講演会のタイトルが「翻訳から翻訳へ」と名づけられた理由もここにある。これまでに見てきたような翻訳の力を軸として、鵜飼氏に現在の事象を語っていただくこと。これが今回の講演会企画の目的である。

第五章 余談：鵜飼氏と「弔鐘」

現在鵜飼氏はデリダ "Glas" を「弔鐘」として翻訳している [\(注47\)](#)。「弔鐘」は左欄でヘーゲルを、右欄でジュネを扱う非常に難解な文章である。デリダは当テキストの英訳が出版された時点においても翻訳を問題としている [\(注48\)](#)。Hegel (ヘーゲル) - aigle (エグル：鷲) から始まる言語ゲームが多数織り込まれたこのテキストを訳す鵜飼氏はこう述べる。少々長いが、引用する。

<Glas を翻訳すること——ある種の「狂気」の発作がなければ、このような決断が私に訪れることはなかつただろう。いくつもの言語で書かれた「原文」を単一とみなされているある「自然」言語に訳し入れること、それだけでほとんど、あらかじめ返済不可能な債務をみずから望んで背負い込むことに等しい。だが、今日、このような状況は、かならずしも Glas や『フィネガンズ・ウェイク』のような特殊なテキストの翻訳者に固有なものではない。この種の困難に直面することなくして、たとえば「クレオール」文学を語ることに、果たしてどれほどの意味があるだろうか。だから、まず最初に、Glas を翻訳することは、この作業に内在する困難がどれほど大きいとしても、今日、「文化」と呼ばれる領域において、けっして特殊な仕事ではありえないということを強調しておきたい> [\(注49\)](#)

加えて、氏は翻訳過程ではありながら、その作業中の翻訳の解説を書く。＜作業中の翻訳の解説を（中略）書き始めること。私にとって、これは初めての経験である。（中略）始まってしまった翻訳の歩みに、未知の他者たちの読解の歩みに、解説の歩みをどのように合わせればよいのか？ どのように追いつき、同時代性を装えば？ これはすべて、翻訳が書物の形で公にされた場合には問われざる問いである。書物の問い、翻訳の問い、そして序文ならざる解説の問い。これらがデリダ的問いの数々であることはすでに知られてひさしい＞ [\(注50\)](#)

ここでの目論みはいかなるものか？ ヘーゲルとジュネを交差配置するデリダを翻訳しながら、自らの解説を同時に交差配置する鵜飼氏の企図とは果たして？

第六章 おわりに

諸言語がある限り、翻訳は終わらない。そして、翻訳はこれまで自然に想定されてきた一言語の統一性、単一性をも疑問に付す。当論では言語という枠組みから検証してきたが、この問題は様々なところで、枠組みを変えながら再考されるものであろう。これが当論の、そして講演会のテーマである。

最後に、鵜飼氏のこの言葉を以て、終わりにしたい。
＜ある意味でテキストへの転移を他者と共有するという経験を数多く重ねてきた。その経験そのものを、誰が考えさせてくれるか。単なる経験主義的な経験としてではなく、こういう翻訳の経験を、そのとき自分は何をしているのかということを考えさせてくれる理論的実践は、今のところ、デリダ以外にない。デリダからいろいろなことを学びつつ、自分に日々起きていることを考えているという風にとりあえず言えるのじゃないかと思います。＞ [\(注51\)](#)

脚注

注 浅利誠「文化の翻訳/翻訳の文化——デリダ」『國文學』所収（1999.10 學燈社）p.52

1

注 鵜飼哲「ハリネズミの前で」『抵抗への招待』所収（みすず書房）p.130

2

注 鵜飼哲「翻訳論の地平」前掲『抵抗への招待』所収 p.147

3

注 『聖書』のラテン語訳に逆らい、ギリシア語・ヘブライ語からドイツ語に翻訳することによって、近代ドイツ語の成立に寄与した（前掲『抵抗への招待』「ハリネズミの前で」pp.137-138）。日本においては二葉亭四迷によるツルゲーネフの翻訳、つまり言文一致運動がこれに当たる。フィヒテも『ドイツ国民に告ぐ』「第六講演」にてルターを参照している（石原達二訳、玉川大学出版部、pp.88-91）

4

注 フィヒテの「ドイツ国民に告ぐ」は様々な訳が出ているが、ここではルナン、バリバール他『国民とは何か』所収（鵜飼哲編訳、インスクリプト）のもの（細見和之、上野成利訳）を使用した。引用は「第七講演」p.119 だが、同書は部分訳であり、その他の部分は前掲の石原達二訳（玉川大学出版部）のものを参照した。

5

注 *ibid.*, 「第四講演」 p.80

6

注 共に *ibid.*, 「第四講演」 p.94

7

注 *ibid.*, 「第四講演」 p.96

8

注 *ibid.*, 「第四講演」 p.78

9

注 <外国人には不可能なのですが——、同時にこの外国人自身の言語をも、それを話してい

10 る当人よりはるかに根本的に理解し、はるかに根源的に所有するすべを学ぶことになるので
す>。引用は、ibid.,「第四講演」 p.95

注 ibid.,「第八講演」 p.124

11

注 ibid.,「第七講演」 p.120

12

注 共にジャック・デリダ『精神について——ハイデッガーとの問い』港道隆訳(人文書院)
13 pp..112-113

注 デリダ「ハイデガーの手(ゲシュレヒト||)」藤本一勇訳『現代思想』所収(1999.5.臨時増
14 刊「総特集=ハイデガーの思想」、青土社) p.129

注 前掲「ドイツ国民に告ぐ」「第四講演」p.80、ハイデガー『ヘルダーリンの讃歌「ゲルマー
15 ニエン」と「ライン」』木下康光訳(創文社、ハイデッガー全集第39巻) p.85

注 日本語では「精神」、仏語では"esprit"、ラテン語では"spiritus"、ギリシア語では"pneuma"。
16 デリダは、このように置き換え可能な言葉でありながら、置き換え不可能な言葉としての
"Geist"を考察する。前掲『精神について』 p.11

注 ハイデガー「ドイツ的大学の自己主張」矢代梓訳『現代思想』所収(1989.7) p.61

17

注 前掲『精神について』 p.53

18

注 ibid., デリダによるハイデガーの読みを注記する。p11: <最後の語〔Geist〕は(中略:ギ
19 リシア語とラテン語)によっては、もはや翻訳されるがままにならない> / p.110: <一方
にギリシア語とドイツ語と、もう一方には世界中のすべての言語(ラング)の間の関係を不
均衡にする> / p.114: <ギリシア語とドイツ語のうちただ一方だけが(中略)精神を名指
すことが出来る。(中略)ドイツ語はしたがって、(中略)最上級の(geistigste)卓越性を
名指す能力をもつ唯一の言語である>

注 ibid., p.19

20

注 ibid., p.113、 p.166

21

注 デリダ『他者の耳 デリダ「ニーチェの耳伝」・自伝・翻訳』C1.レヴェック・C.V.マク

22 ドナルド編、浜名優美・庄田常勝訳（産業図書）p.196

注 <ベンヤミンは翻訳の使命とは言わないで、翻訳者の使命と言っています。つまり、原作の

23 存在によって直ちに負債を負わされ、原作の掟に服従させられ、また義務から、原作のため

に何かをすることを余儀なくされている、そういった主体の使命ということです>。ibid.,

p.209

注 前掲「翻訳論の地平」p.146

24

注 ヴァルター・ベンヤミン「翻訳者の使命」『ベンヤミン・コレクション2——エッセイの

25 思想』所収、浅井健二郎編訳（ちくま学芸文庫）

注 旧約聖書、創世記において語られる神話の一つ。

26

注 ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」『ベンヤミン・コレクション1——近

27 代の意味』所収、浅井健二郎編訳、久保哲治訳（ちくま学芸文庫）p.21

注 デリダによれば<セム（Shem）という単語はすでに名前（nom）を意味している>。前掲

28 『他者の耳』p.172

注 デリダ「バベルの塔」高橋允昭編訳『他者の言語——デリダの日本講演』所収（法政大学

29 出版局 叢書ユニベルシタス 281）p.4

注 固有名は翻訳不可能である。だが同時に翻訳可能な語を含む場合がある。<Pierre〔ピエー

30 ル。フランスで男性につけられる固有名詞〕の中に pierre〔石を意味する普通名詞〕が顔を

のぞかせているのがこれに当たる。この両者は絶対的に異質な二つの価値ないし二つの機能

である>。ibid., pp.10-11 同時に、<バベルが混乱〔confusion〕を意味することは争うべ

からざる事実である>。ibid., p.3

注 ibid., p.3 デリダはヴォルテールの『哲学事典』からこの文を引いている。

31

注 *ibid.*, p.13

32

注 *ibid.*, p.4

33

注 ジョイス『フィネガンズ・ウェイク』の当該箇所において <he> は神を指す。ここで問題と
34 なるのが <war> である。英語体系内では「彼は戦争を仕掛けた」となるが、ドイツ
語体系内では「彼は存在する、した」となる。フランス語では "il declara la guerre" (彼は
戦争を宣言した) と訳されるが、後者の意味は翻訳不可能である。この言語の、英語 - ドイ
ツ語への二重所属 = 多義性はまさしく決定不能であり、翻訳不可能だ。 *ibid.*, p.8、前掲『他
者の耳』 pp.169-170、東浩紀『存在論的、郵便的』(新潮社) pp.12-14

注 *ibid.*, p.7

35

注 *ibid.*, p.13

36

注 ポール・ド・マン「結論：ヴァルター・ベンヤミンの「翻訳者の使命」」『理論への抵抗』所
37 収 大河内昌・富山太佳夫訳(国文社) p.165 付け加えるならば、'Aufgabe'とはドイツ語で
'auf-gabe'である。'Gabe' は第三章-1を見ていただくとして、'auf' はどんな意味を持つか？
英語に翻訳しても、その意味は 'on, upon, in, up' 等多義であり、その他にも色々な意味を持
つ。翻訳後の語にしても、その多義性は了承されるだろう。

注 前掲「バベルの塔」 p.9

38

注 <たとえ或る果てしない翻訳によってこの文章の意味論的貯えを汲みつくしたとしても、そ
39 の翻訳はなお依然として一つの言語で翻訳するだろうし、したがって he war の多数性を失
うだろう。(中略)同時に数個の言語(ラング)で書かれた一つのテキストをどのように翻
訳したらよいのか。複数性の効果をどのように翻訳したらよいのか。そして、同時に数個の
言語で翻訳したとしたら、人びとはそれを翻訳と呼ぶだろうか>。 *ibid.*, p.8

注 前掲『他者の耳』 p.212 <同格においたり、大文字で書いたり(中略)といった方策を援

- 40 用したところで、一つの言語から他の言語に翻訳したことにはならない。そういったやり方は注釈、説明、パラフレーズであって、翻訳ではない>。前掲「バベルの塔」p.10
- 注 前掲「結論：ヴァルター・ベンヤミン「翻訳者の使命」」p.164
- 41
- 注 ibid., p.170
- 42
- 注 デリダ「詩とは何か」鵜飼哲・湯浅博雄訳『[総展望]フランスの現代詩——「現代詩手帳」
- 43 30周年特集版』所収(思潮社)p.253
- 注 ibid., p.251
- 44
- 注 ibid., pp.250-251
- 45
- 注 デリダ「他者の単一言語使用」守中高明訳『現代思想』所収(1999.3)p.100
- 46
- 注 『批評空間』(太田出版)に連載中。現時点(1999.No.23)では第七回まで
- 47
- 注 デリダ「ことわざ——「ことば遊びをする者は……」」鵜飼哲訳『批評空間』所収
- 48 (1997.No.14)pp.158-168
- 注 前掲「弔鐘」第一回目【訳者付記】より p.235-XV 『批評空間』所収(1997.No.15)
- 49
- 注 鵜飼哲「ある嫉妬の物語——『弔鐘』を導入するために [1]」『批評空間』所収(1999.No.21)
- 50 p.85
- 注 鵜飼哲・高橋哲哉・増田一夫の鼎談「討議 脱構築 不可能なものの鼓動」『現代思想』
- 51 所収(1997.3)p.38